

狩猟採集民文化の長期的変化と地域的多様性

—『フォーレジングとコレクティングをこえて』所収の論考を中心として—

羽生 淳子

はじめに

近年、北米の狩猟採集民研究では、生業・集落・社会を含めた文化の長期的変化 (long-term change) に対する関心が復活しつつある。数百年から数千年の長期にわたる文化変化の考古学的研究は、プロセス考古学出現期の1960年代から1970年代初めにかけては数多くみられた (e.g., Renfrew 1973)。しかし、プロセス考古学全盛期の1970年代後半から1980年代初頭にかけては、研究者の関心は、共時的な文化の多様性、特に異なる自然環境への適応システムに集中した。続く1980年代後半から1990年代初頭 (いわゆるポスト・プロセス考古学の台頭期) の研究者も、マクロな視点からみた生業・集落システムの通時的变化の研究には、おおむね消極的であった (註1)。その背景には、マクロからミクロへ、システムから個人へ、そして一般法則の解明から歴史的偶然の強調へ、という研究焦点の移行があった。

プロセスとポスト・プロセスの両極端を経験した北米考古学は、1990年代後半以降、再び多様化の道をたどりつつある (羽生・猪俣1998)。このような変化は、たとえば、考古理論の専門家として知られるトリッガーの一連の論考にも反映されている。トリッガーの著作は、1980年代後半までは一貫してプロセス考古学に批判的だったが、1990年代中頃から後半の論考 (たとえばTrigger 1995, 1998) では、プロセスとポスト・プロセスの両者のアプローチが必ずしも対立するものではなく、むしろ補完的である点が強調されている。

こうした近年の研究動向の中で、従来の理論・方法論の枠内では扱いきれなかった研究課題にアプローチできる題材として、文化変化の研究が改めて注目されている。筆者がこの点を実感したのは、ワシントン大学のベン・フィッツヒューとともに、2000年のアメリカ考古学会 (Society for American Archaeology) で、狩猟採集民のセトルメント・パターンの長期的変化に関するシンポジウムを開催した時であった。『フォーレジングとコレクティングをこえて： 狩猟採集民の集落システムの進化的変化』 (*Beyond Foraging and Collecting: Evolutionary Change in Hunter-Gatherer Settlement Systems*) と題したこのシンポジウムで発表された各論文では、プロセス、ポスト・プロセスという枠にこだわらずに、生業・集落・社会の長期的変化が生じるメカニズム (特に、変化の原因・結果・前提条件等) をさまざまな角度から検討しようという意欲的な姿勢がみられた。各論文の改訂版の集成は、一昨年、同名の単行本として出版された (Fitzhugh and Habu 2002)。

これらの事例研究で提起された理論的・方法論的な諸問題は、一万年余りにわたる縄文文化の発展と変化のメカニズムを考える際にも示唆に富む。本稿では、同書で提起された問題のうち、(1) 生態学的モデルの有効性とその限界、(2) 生業・集落・社会の変化と進化、という二点に焦点をあてて、文化の長期的変化の研究の意義を論じるとともに、その理論的基盤と今後の展望について考える。

生態学的モデルの有効性とその限界

『フォーレジングとコレクティングをこえて』は、そのタイトルからも明らかのように、ピンフォード

(Binford 1980, 1982, 1990) によって提唱されたフォーレジャーとコレクターのモデルの再検討を、目標のひとつとして掲げている。同モデルは、資源の時間的（季節的）・空間的（地域的）な分布が狩猟採集民の移動パターンを決定する主要因であると仮定する、文化生態学的なモデルである。このモデルにおいて、ピンフォードは居住の移動性（residential mobility；居住本拠地の全構成員の移動）を、ロジスティカルな移動性（logistical mobility；特定の資源を獲得するために派遣される資源獲得グループの移動）から区別した。そして、この区別に基づいて、フォーレジャー（移動的狩猟採集民；居住の移動性は高いが、ロジスティカルな移動性は低い）とコレクター（定住的狩猟採集民；居住の移動性が低い代わりに、ロジスティカルな移動性は高い）という、狩猟採集民の二つの類型を設定した。ピンフォードによれば、前者は、資源の分布の時・空間変異が小さい環境に適応したシステムであるのに対し、後者は、資源分布の時・空間変異が大きい環境下で一般的に認められる（モデルの詳細については、羽生 1990, 1994, 2000 を参照）。

『フォーレジングとコレクティングをこえて』に所収された諸論考は、共時的な変異を分析するための道具として提唱されたコレクター・フォーレジャー・モデルが、文化の通時的变化を考える際にどのような役割を果たし得るのかを考える。その過程で、まず俎上に上るのが、生態学的モデルの有効性とその限界の問題である。

たとえば、「中央北西海岸における聖なる力と季節的集落」と題されたキャノン（Cannon）の論考（註2）では、ブリティッシュ・コロンビア州ナミュ遺跡近辺のセトルメント・パターンの変遷を考察する。キャノンによれば、約5000B.C.～2000B.C.頃までのセトルメント・パターンは、サケ漁を中心とする生業・集落システムを核として考えた場合、コレクター・フォーレジャー・モデルによく適合する。これに対し、2000B.C.～1000B.C.以降にサケの収穫量が減少し、この地域のセトルメント・パターンに大きな変化が生じた後にもナミュ遺跡が居住されつづけたという考古学的事実は、コレクター・フォーレジャー・モデルをはじめとする生態学的モデルでは説明できない。その理由として、キャノンは、民族誌事例を基にして、同地域の冬集落は、生業活動の拠点であったと同時に、豊漁を祈る祭祀儀礼が行われる場でもあった可能性が高いと指摘する。そして、ナミュ遺跡をはじめとする冬集落では、長期にわたって祭祀儀礼が行われた結果、その場所に社会的な重要性が付加され、そのために、生業活動に最適の条件が変化した後も居住され続けたのではないかとの仮説を提出する。結論として、キャノンは、生態学的モデルの有効性を評価しながらも、それだけでは、狩猟採集民の居住形態は説明しきれない点を強調する。

非生態学的な要素を重視する姿勢は、他の論文にもみられる。「ロジスティカルな組織、社会的複雑性とカナダ北極圏中央部における先史時代チュー＝鯨漁文化の崩壊について」と題したサヴェール（Savelle）の論文では、チュー＝文化における生業・集落システムの複雑化に伴う社会階層化が、それ以前には柔軟であった生業・集落システムの硬化をうながし、結果として環境変化に対する適応度が低下したのではないか、という仮説が提出される。さらに、アルデンダーファー（Aldenderfer）は、「生産様式の変容をめぐる集落動態変化の説明をめざして：南・中央アンデスにおける狩猟から牧畜への移行」と題した論文において、コレクター・フォーレジャー・モデルの有効性を評価しながらも、ポスト・プロセス学派が重視する、歴史（history）、人為性（agency）、偶然性（contingency）、文化的論理（cultural logic）、という四つの要因を考慮にいれた上でモデルを修正すべきであると主張する。

他の筆者は、直接、生態学的視点に異を唱えはしないものの、コレクター・フォーレジャー・モデルが万能ではない点を強調する。北米北西海岸地域の民族誌を丹念に考察したエイムズの論考（「舟で行く：海上におけるフォーレジャー・コレクター連続体」）は、舟を多用する狩獵採集民の生業・集落システムは、同モデルでは説明しきれない点を指摘する。縄文時代前期後葉から中期初頭における関東・中部地方のセトルメント・パターン変化を論じた羽生の論考（「縄文時代のコレクターとフォーレジャー：日本先史時代狩獵採集民における地域間交流と集落システムの長期的変化」）では、関東地方西南部における諸磯式期後半の遺跡数減少が、地域間の人口移動を引き起こした結果、縄文前期末から中期初めにかけての集落システムが大きく変化した可能性を指摘する。この場合、共時的にみた各地域の生業・集落システムは、コレクター・フォーレジャー・モデルの枠内で説明できるものの、前期末から中期初頭にかけての変化は、関東・中部地方に固有の歴史的出来事ということになる。

同じ生態学的視点でも、進化生態学（evolutionary ecology）を理論的基盤とする諸論考は、コレクター・フォーレジャー・モデルが民族誌事例に基づいた帰納的モデルである点に不満を示す。数理的な演繹的モデルを特徴とするこの学派の研究者（フィッツヒュー [Fitzhugh]、ズィナー [Zeanah]、フィッシャー [Fisher]、キブニス [Kipnis]）の諸論考では、生業・集落、およびそれと密接な関係にある諸要因の関係を精緻な数理モデルとして提示することによって、ビンフォードのモデルの活性化を図る。

これらの諸事例から明らかなように、同書に所収された論文で第一に共通するのは、環境（資源の分布）・生業・集落に焦点を絞ったモデルの限界を認めた上で、使える部分を積極的に使おうとする姿勢である。コレクター・フォーレジャー・モデルを含む社会科学における一般法則モデルには、「規定された以外の条件がすべて同じならば（all things being equal）」という前提が伴っている。しかし、現実の世界では、すべての条件が同じということはあり得ないので、必ず、モデルでは説明しきれない部分が生じる。1980年代後半から1990年代前半に盛んになったプロセス考古学批判では、プロセス考古学の致命的な欠点として、生態学的モデルと現実のギャップに批判の矛先が向けられた。これに対し、上記の諸論文の筆者たちは、モデルと考古資料との不一致が、モデルの弱点を示すものとはみなさない。逆に、モデルに基づいた予測と実際の資料との間のずれにこそ、人間行動を理解する重要な鍵が存在すると考えるのである（この点については、同書に所収されたプライス [Price] のコメント [pp. 420–421] も参照のこと）。

生業・集落・社会の変化と進化

上記の諸論文で第二に共通する点は、狩獵採集民における長期的文化変化のメカニズムとその理論的意義を積極的に考察しようという姿勢である。このような試みの中心のひとつとして、文化・社会の複雑性（cultural and social complexity）の通時的变化の研究があげられる。

狩獵採集民の間に見られる文化の複雑性の度合いは、(1) 生業の集約度、集落の定住度等に基づいて測られる生業・集落システムの複雑性、(2) 階層化を中心とする社会分化の度合い、および分化した各部分（集団・個人）の統合の度合いを問題とする社会的複雑性、の二つの側面から測ることが可能である (Fitzhugh 2003, Habu et al. 2003)。狩獵採集民における社会階層化の過程の研究は、1980年代後半から1990年代前半にかけて盛んになった（註1参照）。ただし、この時期の研究は、単純から複雑へ、平等から階層化社会へ、と

といった直線的な文化進化の概念に合致する変化に研究焦点を絞ることが多かった。

『フォーレジングとコレクティングをこえて』に所収された事例研究で扱われる通時的变化には、階層化社会の形成や、定住化の過程、さらに狩猟採集から農耕牧畜への移行といった古典的な研究課題も含まれる。各論考で提示された文化変化の軌跡のうち、フィツヒューが提示するアラスカ・コディアック諸島における社会的複雑性の発展や、バー・ヨセフ (Bar-Yosef) が描く、近東における旧石器文化から「新石器革命」への過渡期としてのナトウーフ文化の諸特徴は、結果としては、伝統的な文化階梯の構図とよく一致する。しかし、全体としてみると、各論文で論じられる文化変化の方向性の多くは、直線的・一元的なモデルから逸脱する。

たとえば、縄文時代を扱った羽生の論考では、関東地方前期末の生業・集落システムが、季節的定住のコレクターから移動的なフォーレジャーへと変化し、それが縄文前期から中期への大きな変化へつながった可能性が指摘される。サヴェールの論文では、チューレ文化末期における社会階層化の形成が生業・集落システムの硬直化と崩壊をもたらしたと考える。さらに、フィリピンの歴史時代 (A.D. 500~A.D. 1600) における狩猟民と貿易商人との交流を扱ったジャンカー (Junker) の論考では、非狩猟採集民との文化接触の下で狩猟採集民の定住度、集落システム、物質文化が変容していった複雑な過程が考察される。いずれも、直線的な文化進化のモデルとは一線を画する解釈である。

これらの諸論考から明らかのように、同書の副題の一部である「進化的変化 (evolutionary change)」の概念は、生物進化論における狭義の進化の定義よりも広義であるのはもちろん、単純から複雑へ、移動から定住へ、狩猟採集から農耕へ、という進歩主義的な社会進化論における進化の定義とも異なる。各論考が考察した事例研究は、コレクター・フォーレジャー・モデルの基本をなす資源分布、生業、セトルメント・パターンの他にも、人口密度、技術革新、交易、宗教儀礼、社会階層化といった、複数要素を変数として考えることにより、地域ごとに多様な文化の軌跡を描き出す。

「進化的変化」の概念がこれだけ広義にとらえられてしまうと、この概念は単なる「変化」と同義ではないか、という疑問が生じるかもしれない。加えて、ポスト・モダン系の文化人類学者やポスト・プロセス考古学者の中には、過去にさまざまな意味で使われてきた「進化」の概念は破棄すべきであると考える研究者もいる。しかし、『フォーレジングとコレクティングをこえて』に所収された諸論考が扱っている変化は、(1) 変化が不可逆的である、(2) 長期的視点から文化の流れを振り返った場合、その変化が、後の流れに大きなインパクトを与えていた、という二点において特徴的である。

北米考古学において、「進化的変化」と時に対比される形で論じられるのが、「歴史的偶然 (historical contingency)」である。進化的変化の原因と結果が、前提条件さえ明らかにされれば論理的に説明可能であるのに対し、「歴史的偶然」は、突発的で説明不能である。さらに、ポスト・プロセス系の研究者が用いる「歴史」の概念には、個人の創造性 (creativity) を含む人為的要因 (human agency) までも含まれることが多い。しかし、『フォーレジングとコレクティングをこえて』の諸論考が扱っている変化の多くは、歴史的な個別性 (historical uniqueness) を保ちながらも、変化のメカニズム自体は、論理的な説明が可能である。この点で、同書に所収された諸論考は、プロセスとポスト・プロセス、「進化」と「歴史」の二分法をこえて文化の長期的変化を考えるための、ひとつの布石と成り得る。

考察と展望

以上、生態学的モデルの有効性とその限界と、生業・集落・社会の変化と進化、の二点を中心として、文化の長期的変化を扱った研究の実例を紹介するとともに、今後の可能性を論じてきた。ここで紹介した事例研究の理論的基盤は、文化生態学（主として同書の第1部に収録された論考）、進化生態学（同第2部）、社会考古学（同第3部）と多岐にわたる。興味深いのは、理論的基盤を異にするこれらの研究に、上記のような共通する問題意識がみられることである。

『フォーレジングとコレクティングをこえて』のもうひとつの特徴は、事例研究が世界各地から寄せられていることである。伝統的な狩猟採集民の考古学的研究は、ヨーロッパ、近東、北米を中心として発展したため、生業・集落・社会に関するモデルも、これらの地域の事例をもとにしたもののが多かった。同書に収められた事例を比較すると、古典的なモデルの枠には収まりきらない多様な文化の軌跡が、地域ごとに明らかになる。そして、これらの事例から考えると、日本も含めて、従来の英米考古学では重要視されてこなかった地域の研究が、多様性の解明に、今後、重要な役割を果たして行くことが予測される。この点で、日本考古学における縄文文化研究の将来も、世界の狩猟採集民研究の動向と分かちがたく結びついているのである。

謝辞

本稿を作成するにあたり、鈴木公雄先生には、草稿をお読みいただき、内容について有益なご助言をいただいた。末筆ながら、ここに深く感謝の意を表する。

註

- 1 ただし、通時的变化の中でも、社会階層化の過程に関する研究は脚光を浴びた（e. g., Arnold 1992, Matson and Coupland 1995, Price and Feinman 1995）。これは、生業・集落システムの解明から社会の研究へ、という流れの結果であった。
- 2 本文中に引用されている文献のうち、*Beyond Foraging and Collecting* 所収の論文については、スペースの関係で、下記の引用文献リストから除外した。各著者の論文の所収ページは、以下の通りである： Kenneth M. Ames, pp. 19-52; Junko Habu, pp. 53-72; James M. Savelle, pp. 73-90; Ofer Bar-Yosef, pp. 91-149; Lynn E. Fisher, pp. 157-179; Renato Kipnis, 181-230; David W. Zeanah, pp. 231-256; Ben Fitzhugh, pp. 257-304; Aubrey Cannon, pp. 311-338; Laura Lee Junker, pp. 339-386; Mark Aldenderfer, pp. 387-412; T. Douglas Price, pp. 413-425.

引用文献

- Arnold, Jeanne, E. 1992 Complex hunter-gatherer-fishers of prehistoric California: chiefs, specialists, and maritime adaptations of the Channel Islands. *American Antiquity* 57 (1): 60-84.
- Binford, Lewis R., 1980 Willow smoke and dogs' tails. *American Antiquity* 45 (1): 4-20.
- Binford, Lewis R., 1982 The archaeology of place. *Journal of Anthropological Archaeology* 1 (1): 5-31.
- Binford, Lewis R., 1990 Mobility, housing, and environment. *Journal of Anthropological Research* 46 (2): 119-152.
- Fitzhugh, Ben, 2003 The evolution of complex hunter-gatherers on the Kodiak archipelago. In *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim*, edited by Junko Habu, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo, pp. 13-49. Senri Ethnological Studies No. 63. National Museum of Ethnology, Senri, Osaka.
- Fitzhugh, Ben and Junko Habu (eds.), 2002 *Beyond Foraging and Collecting: Evolutionary Change in Hunter-Gatherer Settlement Systems*. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

時空をこえた対話—三田の考古学—

- 羽生 淳子 1990 「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』第53号1~14頁
- 羽生 淳子 1994 「狩猟・採集民の生業・集落と民族誌」『考古学研究』第41巻第1号73~93頁
- 羽生 淳子 2000 「縄文人の定住度」『古代文化』第52巻第2号95~103頁、第4号18~29頁
- 羽生 淳子・猪俣 健 1998 「1996年の動向：アメリカ」『日本考古学年報』第49巻86~90頁
- Habu, Junko, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo, 2003. Introduction: complex hunter-gatherer studies in Japan and the North Pacific Rim. In *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim*, edited by Junko Habu, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo, pp. 1-9. Senri Ethnological Studies No. 63. National Museum of Ethnology, Senri, Osaka.
- Matson, R. G. and Gary Coupland, 1995 *The Prehistory of the Northwest Coast*. Academic Press, San Diego.
- Price, T. Douglas and Gary M. Feinman (eds.), 1995 *Foundations of Inequality*. Plenum Press, New York.
- Renfrew, Colin (ed.) , 1973 *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. University of Pittsburgh Press, Pittsburgh.
- Trigger, Bruce G., 1995 Expanding middle-range theory. *Antiquity* 69: 449-458.
- Trigger, Bruce G., 1998 Archaeology and epistemology: dialoguing across the Darwinian Chasm. *American Journal of Archaeology* 102 (1): 1-34.